



ありあけ

佐賀大学農学部
同窓会報

No.23

発行日 2019年1月1日
編集 会報編集委員会

発行 佐賀大学農学部同窓会
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700
E-mail dousoukai@sadai.jp
ホームページ <http://sadai.jp/alumni/nougakudousoukai/>

巻頭言



九州北部豪雨災害からの復旧・復興を目指して

～農家が夢と希望を持てる普及指導活動を～

福岡県朝倉普及指導センター長 石川 博 基
(S58年卒 農・作)

私は、福岡県に農業技術職として採用され36年目になる。平成30年は福岡県協同農業普及事業70周年にあたるが、昨年、この朝倉普及指導センターに赴任して間もなく、所管する朝倉市・東峰村が50年いや100年に一度と言われる豪雨災害に見舞われるとは夢にも思っていなかった。

平成29年7月5日11時頃から降り始めた雨は、滝の様な大雨となり、山の斜面を削り、河川を氾濫させて、住宅を押しつぶし、田・樹園地、作物を破壊した。甚大な被害を受けた朝倉市黒川ではたった9時間で774mmという記録的豪雨を観測している。

今でも激しい雨音を耳にすると、心がざわつき不安になる。災害からの早期復旧・復興が叫ばれているが、たぶん被災者の心の中で災害の傷は癒えることはない。

今振り返ると、山道を迷った時のような、海で潮に流された時のような、砂漠の中をどこに向かって進めばよいか全くわからなくなった時期があった。



無我夢中に目先の対応だけであたふたと駆け巡った時期もあり、気持ちが高揚し過ぎて疲れを知らない時期、そうかと思えば気力が落ち込んだ時期、的を射たことが何も出来ずに生産性のないことばかりやっていた時期があった。心が乱れ、職場の人間関係が乱れ、関係機関との連携がうまくできず、感情をぶつけ合ったり、他人の批判ばかりに心を奪われた時期もあった。農家と話をするたびに涙があふれ、戦争でも起こったかのような被災地を見るたびに無力感が心を占領する。時には吐き気を伴う。

私たち普及職員は、被災地の復旧・復興のために「できることは何でもやろう」と心に誓い、これまで活動してきた。それからたった1年が経過した今、その初心がほんやりと薄れかけ、まるで他人事のように感じるのが怖い。こんな災害は二度とあってはならない。普及指導センターに何ができるのか。このような大災害の経験は今までになかった。

初動を間違えてはならない。これを間違えると取り返しのつかないことになる。これは私が被災当初から肝に銘じてきたことである。市町・JAが機能しない中、情報は錯そうした。被害の全容を掴み現状をきちんと認識するためには、危険が伴うが現地に足を運び、自分たちの目で確認することが重要であった。行政が行う被害調査を率先して担った。職員からは「早く被災者や被災地域の技術・経営指導を行うべきだ。被災額の確定作業など被害調査にあまり深入りすべきではない」「技術対策資料を早く作成し、農家に情報提供しよう」との意見があがった。しかし、情報がほとんど農家に行きわたらない。

悲しいが、届くはずがないことが被災後2～3日してやっと認識されるしだいだ。

技術・経営支援は無力だった。しかし職員から提案があった。「農家の庭先に足を運び、寄り添い、悲しみを共有し、農家が少しでも収入を確保するため営農意欲を呼び起こすことが大事だ」と。それが被災から1週間後に県下全域の農林水産部職員による人的支援に繋がった。休日を利用し猛暑の中、土砂の搬出を行った。きつかったが満足感でいっぱいだった。被災園主の老夫婦から「助けてください。お願いします」と両手を合わせて拝まれたのは社会人人生で初めてだった。我々は復旧事業の仕組みを知らなかった。普及だけでできることはほとんどないことを思い知った。補助事業の説明会から申請受付、復旧事業を進めるための座談会の開催など、農家のためなら何でもした。農家（農業士、部会役員、女性農村アドバイザー、4Hクラブ員など）からの情報と普及員OBからの助言が参考になった。センター長としての意思決定に自信が持てた。危機管理に奔走した最初の半年だった。

普及だけでは何もできない。発災から4か月たっ

てやっと関係機関で構成する「災害復興プロジェクト」を立ち上げ、対応の全てを一元化させることができた。朝倉市・東峰村では「復興計画」が策定された。災害復興プロジェクトでは農業のより具体的な「アクションプラン」を作成し、復興さらに地域農業発展に向け着実に活動を実践していくこととなった。平成30年9月、復旧事業の申請に漏れた数百筆の果樹園が見つかった。この対応も今、普及が中心に行っている。農家の庭先に辿り着けるのは、結局普及だった。情報を届ける。意思を確認する。見届ける。1戸1戸の農家の顔を見ることができ普及の強みである。時代の要請に応じて普及はその姿を変化させてきた。食料増産、選択的拡大、減反、担い手育成など。そしてこれからはリスク管理への対応が求められるだろう。復旧・復興は下手すれば10年後かもしれない。復旧後に農家がどれだけ残っているだろうか。農業は本当に再興するだろうか。そんな不安が頭をよぎりながらも、少しでも前に進んで行きたい。過信せず、自信を失わず、現場を預かる使命と誇りを持って、農家が夢と希望を持てるような普及指導活動を展開することである。

在学生と大学教職員・卒業生の交流会を開催 ～参加者からの評判は上々！ 在学生との交流さらに深まる～

例年、初冬の11月に開催していた在学生・大学教職員・卒業生の三者が一堂に会する交流会を7月11日に開催いたしました。

この交流会は「佐賀大学OB・OGによる業界セミナー」（対象は農学部3年、同大学院1年の在学生）の後段にセットして同窓会が企画運営しているものですが、5年目の今年は前段のセミナーの開催時期が早まったことから、それに合わせて、この交流会も7月に実施しました。

前段のセミナーは農学部大講義室において、伊藤



交流を呼びかける小池会長

ハムウエスト(株)、久原本家グループ、山崎製パン(株)、シャボン玉石けん(株)、佐賀県農業協同組合の5社から人事担当と入社して数年の農学部OB・OGによる企業紹介などが行われましたので、農学部同窓会では、かささぎホール（旧第二生協食堂）に



須古寿司、冷たいおでんなどの軽食を用意し、セミナー参加企業と在学生がもっとざっくばらんに話せるような場づくりを行いました。



さらに、先輩・後輩談義で賑わいながら交流を深めてもらえるような打ち解けた雰囲気を作るため、

県内の同窓会支部である佐賀県庁、佐賀市役所、学校教職員、JAグループ（今回はJAさが）にご理解を賜り、後輩達のために若手職員や支部役員の方々が1日の仕事を済ませたあとに駆けつけていただきました。

交流会は主催者である農学部同窓会小池会長の「同窓会として在学生の就職活動を支援していきたい」のあいさつから、有馬農学部長の「在学生はこのような機会を生かしてほしい」とのお言葉をいただいたのち、有馬農学部長の乾杯によりスタートしました。

乾杯の後、在学生は思い思いに企業・団体ごとのテーブルを回り、先輩たちに質問しアドバイスを受けていました。

交流会には、セミナーに参加した在学生約80人の約半数と、これに大学教職員、卒業生、同窓会役員等、合わせて約60人が出席。今年は昨年より参加者は20人ほど減少しましたが、参加した在学生からは、「人数が少なかったので、各企業（の先輩方）とゆっ

くり話ができてよかった」といった話があるなど、大いに盛り上がり上がっていました。

最後に、若手先輩を代表して佐賀県農業協同組合に勤務される江原恭平さん（H27年卒 生環・地盤）から、激励の言葉として在学生の今後の就職活動に熱いエールをおくっていただき、交流会を無事、終了することができました。

同窓会では、交流会がよりよき会となるよう、参加者からアンケート調査でいただいたご意見等を参考にしながら、今後、同窓会としてできる在学生支援の検討に役立てていきたいと考えていますので、今後の同窓会員の皆様方からの支援、ご協力をよろしくお願いします。

瀬尾 裕一（S63年卒 農・育種）



後輩を激励する江原さん

農学部と農学部同窓会との意見交換会

佐賀大学農学部から農学部長や各学科長などにご参加いただいて毎年、実施している「佐賀大学農学部と同窓会の意見交換会」を平成30年12月5日、菱の実会館において開催しました。

農学部からは有馬進農学部長を始め、鄭紹輝副学部長、小林元太副学部長、大島一里副学部長、早川洋一応用生物科学科長、北垣浩志生物環境科学科長、永尾晃治生命機能学科長、山崎欽哉農学部事務長の参加をいただき、同窓会からは小池同窓会長、水田・吉賀副会長、青木教職員支部長ほか各支部役員など9名が出席いたしました。

意見交換会では、小池同窓会長からの挨拶に続き、有馬学部長から、農学部では地域創生の中核となる大学とするため「2019Reborn（リボーン）」と題し、

現在の3学科を1学科4コースに31年度から改組する準備を行っていること、企業や県・市町等と連携して、地域に密着した

4つのプロジェクト研究（「植物工場プロジェクト」、「藻類バイオマスプロジェクト」、「有明海・水産プロジェクト」、「コスメティックプロジェクト」）に取り組んでいるといった近況報告がありました。

続いて、各学科長から農学部生の就職率が非常に高いことや、藻類を活用した研究を企業と連携して行っているなどといった状況報告がありました。

同窓会支部からは意見や要望、質問等を出して、農学部と次のような意見交換を行いました。

佐賀県支部からは、31年度から改組される農学部の特徴と強みを地域社会により積極的に分かりやすく情報発信することや学生が社会的課題の解決に向けて自主的に取り組む活動なども学部の財産として広くPRすべきという意見が出され、農学部では大



意見交換会の様子



小池良美会長



有馬進農学部長

学広報を活用して広くPRしたいとの話がありました。

教職員支部からは、農業科の教員が高齢となり、教員免許を取得する学生を増やしてほしいという意見が出され、農学部では農業科と理科の免許取得ができるようにしているが、近年では農業科の免許取得は採用が少ないこともありここ3年は1～2名程度であることの説明がありました。

農協連支部からは故伊東勇夫先生が行われていた協同組合論に関する講義を現在の学生は受講する機会がなくなっていると聞いているので環境づくりをしてほしいという要望が出され、同窓会からも協同組合論を研究している研究者・実践家等を非常勤講師として招聘し集中講義という形で実施する方法な

どもあるのではないかと提案したところでした。

農業自営者の会からは、農業県にある大学として新品種の開発など、生産者に見える研究成果への熱い期待が述べられました。

また、熊本県庁支部からは、29年度3名30年度1名と新たな会員を迎えることができたことから、今後も新規加入が続くよう、熊本県庁への就職ガイダンスをお願いしたいという要望を農学部にお伝えいたしました。

意見交換終了後は、出席者全員の参加をいただき懇親の場を持ちました。農学部発の日本酒「悠々知^{ゆうゆうち}酔^{すい}」をいただきながら、打ち解けた雰囲気で大いに盛り上がりました。

瀬尾 裕一（S63年卒 農・育種）

農業版MOT特別講演会「地域の産学官連携による農業人材育成」

平成30年7月27日に、農業版MOT特別講演会を佐賀市ホテルマリターレ創生佐賀において開催しました。地域の労働市場における労働力不足が深刻化し、将来の地域農業や農村の持続的発展が懸念される中で、今後の地域における農業人材育成に向けた産学官連携の在り方をテーマにディスカッションを



パネルディスカッションの様子

行いました。

当日は、岩手大学農学部の「いわてアグリフロンティアスクールの取り組み」、佐賀大学農学部の「農業版MOT」、佐賀県農業大学校の「佐賀農業経営塾」の基調報告と事例報告をもとに、教育目標や育成する人材像、提供する教育カリキュラム、運営体制などについて活発な討議が行われました。

各取り組みの強みを持ち寄ること、人材育成についての地域の関係機関の合意と共有の必要性、学ぶ層が多様化する中でどう対応するか、ニーズに合わせた教育内容の工夫、受講者の安定的な確保と修了後のフォローアップの大切さ、支援するマンパワーの充実と安定的な財政基盤の確保などが今後の課題として挙げられました。

内海 修一（S49年院修了 農経）

高木胖氏から農学部同窓会へ多額の寄付

このほど、高木胖氏（S36年卒 農・育種）から、農学部同窓会に対し多額のご寄付をいただきました。厚く御礼申し上げますと共に、会員の皆様にご報告いたします。

同氏は、草創期まもない農学部同窓会の体制強化と発展のために長年同窓会役員として運営や資金集め、会誌担当として奔走され、同窓会の組織強化に多大なご貢献をいただきました。

先ごろ、お目にかかりお話しする機会を得ましたが、ますますお元気で、同窓会への人一倍の思い入れや往時のことを楽しそうに語られる様子が印象的でした。

たまわりましたご厚志につきましては、同窓会役員会で有意義な活用を検討させていただきます。

小池 良美（S56年卒 農・経）

佐賀県果樹試験場 稲富和弘場長が研究功労者表彰受賞

佐賀県果樹試験場の現場長である稲富和弘先輩（S58年卒 園・果）が、今年度全国農業関係試験研究場所長会から研究功労者表彰を授与されました。今回の受賞は「ニホンナシの施設栽培技術の開発と全国一の施設ナシ産地育成」に大きく貢献されたことが認められたものです。

10月26日には佐賀市の「グランデはがくれ」において、100名を超える県関係職員や農協技術員が集まり、盛大に祝賀会を開催しました。祝賀会では農林水産部副部長の池田宏昭先輩（S59年卒 農・熱）から業績を称えるご祝辞の後、記念品と花束が贈呈されました。稲富先輩は、「研究者・技術者の仲間や多くの果樹農家に支えられて本賞を受賞することができた」と感謝の意を述べ、後輩へも研究の深化と本県の果樹振興へ向けた熱いメッセージをいただきました。

祝宴では、参加者一同、稲富先輩を囲んで時間の経つのも忘れて、万歳三唱後も、なかなか解散にならないほど、大いに盛り上がりました。稲富先輩の今回の受賞に敬意を表するとともに、私たち後輩も後に続くように頑張らないといけないと改めて思いました。

夏秋 道俊（S61年卒 化・肥）



稲富和弘氏のあいさつ

若手OB・OGからのメッセージ

未来の自分のために貯蓄を！

JAさが営農企画支援課 池田 春奈
（H30年卒 応・野菜）

私は平成30年3月に佐賀大学農学部を卒業後、JAさがに就職し、営農指導関係の仕事をしています。私は営農指導員として、農家の方に栽培技術等を指導したいという理由で就職したのですが、間もなく大きな壁につきあたりました。それは、全く何もわからないということです。営農指導の技術の知識どころではありません。単語の意味が分からず、何を言っているのか分からないというところからのスタートでした。

就職したばかりの頃は、電話対応や事務作業であっても、単語の意味すら分からなかったため、全てが難しく感じました。会議に出席したときは、話の内容が理解できず混乱していました。

さらに、圃場巡回に行くと、私以外の人は少し作物を見るだけで病気や害虫を判別したり、どの栄養素が足りていないか分かったりしていたのにもかかわらず、私は皆目見当がつかないといった状況で、非常に焦りを覚えました。学生時代で少し知識をつけてきたというものの、それだけでは全く足りなかったのです。そして私が深く感じたことは、社会

人は学生以上に勉強しなければならないということでした。

「勉強」に関して学生時代と社会人で大きく変わったと感じる点は、勉強が受動的か能動的かという点です。学生時代は、講義を座って受けるだけで勉強することができます。しかし、社会人は自分から進んで勉強しないと成長しません。私は就職して間もなく、担当した職務に必要なと感じた資格があったため、自ら研修会を受け、勉強し、GAP指導員・内部監査員の資格を取得しました。

また、学生の皆さんには、今のうちに「勉強」をたくさんしてほしいです。学生時代、栽培技術・植物生理・病理学・防除など大学時代に山ほど習ってきましたが、それらの知識をまだ仕事に繋げることができていません。自分でももったいないと思っています。学生の皆さんがどのような職業につくかは分かりませんが、少しでも未来の自分のために貯蓄をしておいてください。将来、役に立つ日が来るか



もしれません。

これから任せられる仕事が増え、覚えることもたくさん出てくるかと思えます。しかし、自ら進んで

勉強するということを忘れず、色々な経験して学生のときに学んだことを今の仕事に繋げ、日々成長を続けていきたいです。



大学時代に広い視野で物事を考えることの大切さ！

(株) オプティム 星野 祐輝
(H30年院修了 資源)

私は、佐賀大学農学研究科施設農業生産学研究室で主に好気高温発酵を用いた液体肥料の製造に関する研究をしていました。現在は、株式会社オプティムというIT企業に勤めています。この会社に勤めた経緯としては、佐賀大学、佐賀県、オプティムで3者連携協定を結んで農業×ITに取り組み始めた当初から、アルバイトとして関わらせて頂いており、働く中で社長や社員の方々の人柄、会社の目指していく方向性などに共感して入社を決めました。

現在は農業×ITの部署で企画業務を担当しています。業務内容としては、①ピンポイント農薬散布栽培技術の確立②新規事業の立ち上げなどをやっています。①では、通常、圃場全体に防除を実施しているのに対して、ドローンを使って圃場を撮影し、画像をAI（人工知能）で解析することで、病害虫が発生したポイントにのみ農薬を散布して防除することが可能になります。これにより、農家としては労力や農薬コストが抑えられ、消費者としては農薬使用量を抑えた農作物を食べることができるようになります。

今年度も全国の農家の方々と実際に栽培をさせて頂き、水稻、大豆、枝豆、キャベツなどの作物の栽

培を実施しています。今後はその他の作物でもピンポイント農薬散布での栽培を実施するために、技術開発



に取り組んでいきたいと思っています。②では、今年度の8月から始めたDRONE CONNECTという農家とドローンパイロットのマッチングを行うサービスの立ち上げから実運用までを担当しています。農業分野でも農薬散布や圃場撮影などのドローンニーズが増えており、効率的にマッチングするための場所を提供しています。今後も、農業分野の発展に協力できるように全力を尽くしていきたいと考えています。

後輩の皆さんへのメッセージとしては、大学時代に広い視野で物事を考えるように心がけて頂きたいです。大学の研究という狭い分野だけでなく、いろいろな分野にチャレンジしていくことで、私の経験上、新たな解決法や自分が本当にやりたいことを見つけることができます。私も大学時代は食品企業への就職を考えていましたが、現在の会社と出会ったこと、また農業版MOT教育の中で多くの農家の方々と触れ合う中で考え方が変わり、自分が本当にやりたいことを見つけることが出来ました。

多くのことを学び、経験を積んで生産者の方々にいい成果を！

佐賀県農業試験研究センター 松本 茜
(H29年卒 応・育種)

佐賀県農業試験研究センターで花の研究を担当している、松本茜です。入庁して、早くも2年が経とうとしています。この2年間は毎日が勉強で、とても充実した濃い時間であり、あっという間に過ぎていったように感じます。

入庁当初は、恥ずかしながら花の名前を聞いても

その姿が思い浮かばないほど、花の知識がありませんでした。また、もともと植物を栽培することが苦手な私は、ハウスでの本格的な栽培に、とても不安を感じていました。試験をするためには、植物を作りこなすことが前提となります。栽培経験の浅い私は、植物のちょっとした生育の違いを見極めることができず、途中で枯死する株が出たり、病害虫が多発したりと、苦戦することが多々ありました。そのたびに、植物の状態を観察し、本で調べたり、上司や生産者から助言をもらったりすることで、少しずつですが、生育の違いを見極められるようになってきました。

私は現在、トルコギキョウとシンテッポウユリの選抜試験、佐賀県で育成したホオズキ新品種の栽培試験およびトルコギキョウの突然変異育種を行っています。トルコギキョウの突然変異育種は、鳥栖市にある九州シンクロトロン光研究センターにおいて、放射光の一種であるシンクロトロン光を種子に照射することによる変異誘発を行っています。徐々に種子に照射する際の適正な吸収線量（光の強さ）が絞られてきたところです。今後は世代を展開し、変異形質の把握を行う予定です。どんな変異が現れるのか、とても楽しみにしています。

まだまだ分からないことが多く、失敗して悩むことも多々ありますが、とても楽しく、やりがいのある仕事だと感じています。毎日一つでも多くのことを学び、経験を積んで、生産者の方々にもいい成果を提供できるよう、今後も励んでいきたいと思っています。



会員のた場

地域でのボランティア活動について

江頭 俊雄（S51年院修了 作）

私の大学時代の思い出として、農学科では研究室対抗のソフトボール大会が開催された。農経の内海氏、畜産の岡本先生、私達の作物の三チームが優勝争いをしていた事を今でも覚えている。このようにソフトボール大会によって農学科では、研究室間の連携や先輩後輩の融和がとれ非常に良かったと思っている。

さて、私は退職後、地域でのボランティア活動で忙しい日々を過ごしている。ボランティアの1つが佐野常民記念館で三重津海軍所跡・佐野常民のガイドを行っている。三重津海軍所跡が世界文化遺産登録決定（H27年7月）後、見学者は急激に増加し一ヶ月約2万人が訪れ、見学者のガイドに忙しい日々が続いた。本当に世界遺産の効果に驚くばかりであった。ただ、28年度に入り熊本震災の影響等もあり見学者は減少したが、それでも現在1か月約1万人は訪れている。三重津海軍所跡は、見えない遺産（日本で一番古い「ドライドック」、日本初の実用蒸気

船「凌風丸」等）のためガイドの役割が重要である。見学者が説明を受けて「ありがとうございました」と言って帰られるとまた明日も行こうとなる。ガイドをしていると鍋島直正公と佐野常民の偉大さが改めて分かる。特に、佐野常民は日本赤十字社の創設者で有名であるが、若い時は三重津海軍所の監督者を務め、さらに「精煉方」（現在の理化学研究所）の主任も務め、「凌風丸」を完成させている。2つ目が、校区のまちづくり議会の活動である。中川副公民会主催で歴史探訪ウォーキング（月1回）が開催され、私が案内コースと資料を作成し案内している。校区の人に参加していただき健康を維持するとともに歴史探訪という目的を持ってウォーキングを実施する事で、非常に好評で開催を始めて20回になり定着した。

3つ目が、公民館だよりの執筆活動である。月1回発行されているが、地区の歴史について頭を抱えながら書いている。さらに、今年は明治維新150年記念行事が開催されているが、各校区での偉人を作成する事になり、公民館と一緒に6人の地域の偉人を作成した。この中の1人が楠木伐採を阻止し、楠木おばさんで有名な福田ヨシである。福田ヨシの生家の跡が早津江に残っている。このように、地域の偉人を発掘する事で、地域の方はもちろん偉人の子孫の方にも連絡をして喜んでいただいた。私は、このようなボランティア活動をしている。退職後は、地域のために行動を起こす事が重要と思っている。会員の皆さんの地域貢献活動に期待している。



発掘された日本最古のドライドックの木組（佐賀市教育委員会提供）

自転車遍路旅と国際交流

古川 辰馬 (S40年卒 農・育種)

平成30年5月から6月にかけて、日本1、台湾6、計7名による四国自転車遍路旅に参加した。台湾の友人からの誘いが旅のきっかけであったが、直前になって、当の友人が急に参加できなくなり、彼のサイクリング仲間6人(初対面)と旅をすることになった。

四国霊場88カ所を巡るコースは全長1400kmにも及び、途中、険しい登り下りも多い。女性二人を含むメンバーには体力差があり、天気の良い悪しによっても走行距離は大きく違ってくるため、事前に立てた計画通りにはいかなかった。結果的には、彼らの日本滞在期間(19日間)中に余裕をもって88札所を回り終えるため、自転車以外の乗り物(列車、バス、タクシー等)も利用し、全てを参拝し終えるのに16日を要した。自転車で走った距離は870kmで全行程の6割程度であった。

台湾のメンバーに日本語を話せる人はいなかった。当初、多少誤解も生じたが、道中の困難を乗り越える中で、次第に連帯感が生まれ、ともにいたわり合い、支えあった。二人の女性を含む台湾の人達は皆親切で、途中私が転倒して膝を擦りむいたときには親身になってケアしてくれた。

台湾チームの平均年齢は60歳くらいで役割分担がうまくなされていた。スマホのナビゲーターで道案内する人、自転車の点検、修理を担当する人(プロ並みの腕前)、支払いその他金の管理をする人、私に通訳してくれる人(英語)と人材をそろえていた。私の役割はもっぱら日本語を使う場面、主に宿の手配、道案内のサポートであった。宿の手配を担当して困ったことは、その日にいくつの寺を回れるか予測がつかないことであった(従って宿の予約が遅くなる)。各札所では参拝した証しとして墨書と御朱印をいただくが、各寺ともこの窓口が17時に閉鎖される。到着が10分遅れたため、その日はこの寺の近くに泊まらざるを得ず、予約していた他の宿をキャンセルしたこともあった。せめて締め切り時間を30分延長してくれたらと思う場面がしばしばあった。

道中の宿泊には遍路宿を利用した。遍路宿の特徴

は、総じて建物が古い、おかみさんが親切、宿泊料金が手頃(一泊二食付きで6~7千円)、といったところ。「お接待」で食べ物の差し入れをしてくれる宿もあり、自転車旅には適していると思う。しかし、安い宿の中には、食事も設備も本当に良くない宿があった。女性を含む7人で2~3部屋は確保する必要があるためこのような宿に泊まらざるを得ないことも何度かあった。そんなときは宿泊担当の私としては彼らに申し訳ない気持ちで一杯だった。

宿での生活を紹介する。夕方5時前後に宿に到着、まずシャワーで汗を流す。そのあとすぐ洗濯、男性5人分衣類を洗濯機に放り込みスイッチオン。夕食後洗い終わった洗濯物を部屋に張ったロープに掛けて干すと翌朝までにはきれいに乾いていた。夕食は一日で一番楽しい時間だった。今日の疲れを取り、明日のランに備えるため皆よく食べた。台湾の人達は納豆も生卵も普通に食べていた。遍路宿の朝は早い。朝食はこちらの希望する時間に合わせて作ってくれる。大体5時起床、6時出発というのが多かった。出発時はどこの宿でもおかみさんが手を振って見送ってくれた。

結願寺(けちがんじ; 巡礼を終えた最後の寺)は香川県高松市の82番札所根香寺であった。88札所を走破した16日間の長い道中、大した事故もなく全員ここに立つことができたことに感謝し手を合わせた。

台湾の皆さんとの間には当初、言葉が通じないため少々ごちないところもあったが、苦しい急坂、雨風の中の走行といった困難を積み重ねる中で、少しずつ距離が縮まり、別れの日には、なごり惜しい気持ちで一杯だった。

巡礼の旅が縁で生まれた台湾の人達との交流を大事にし、今後、台湾で、また佐賀で彼らと共に再びサイクリング出来る日が来ることを願っている。

最後に、台湾チームとの自転車旅という貴重な体験の場を与えてくれた台湾の友人、蔡さんに感謝する。



12番札所 焼山寺



朝の出発風景



雨の日トンネルで小休止



60番札所横峰寺(標高745m)
深山幽谷の美

国立韓国農水産大学校の女子学生金さん・宋さんの農家研修

●●● MOT2期生西村洋介さんの農場で1年間の長期研修 ●●●

平成30年2月から1年間、韓国農水産大学校の女子学生、金希玲さんと宋怡林さんが、農業版MOT2期生の西村洋介さんの圃場で施設野菜（光樹トマト、キュウリ）研修に頑張っています。

金さんの実家は、祖父・祖母が水稲とハクサイを栽培、宋さんの実家は、母が150頭の肥育（韓牛）経営に取り組んでおられます。



西村さん、金さん、宋さん

11月に研修圃場を訪ねると約30cmほどに育った光樹トマトの支柱立ての作業に懸命に頑張っていました。金さんは日本語も流暢で、宋さんは、半分ぐらい分かったと話していましたが、2人ともとても日本語がうまく、いろいろな話を楽しく伺うことができました。

農作業研修の感想を聞きましたが、2人ともハウス内の温度が40度になる夏場のハウスキュウリの収穫管理作業が最もきつかったとのこと。西村さんも早朝から午前中に栽培管理が終わるように気配りを

しながらの研修に努めたとのことでした。

光樹トマトは、川副町のグループが取り組んでいる「トマトの本物の味」を追求する節水栽培型で、育苗から定植、土壌・水管理、病害管理、収穫作業など、西村さんから一連の緻密な指導を受けながら勉強する毎日だったようです。宋さんは、トマトは嫌いだったが、光樹トマトを食べて甘くて好きになったとのこと、また、大葉もフライなどで好きになった、金さんはお米「さがびより」がおいしかった、韓国でも負けない米作りをしたいと話してくれました。

2人は農作業のほかにもバルーンフェスタで地元の4Hグループの餅つき大会に参加し、餅まるめを手伝ったり、また佐賀大学農学部のMOTアグリ・マイスターの会にも参加するなど、幅広く交流を広げていました。休みには、佐賀市のゆめタウン、福岡、久留米、ハウステンボスなどに出かけ、観光やショッピングなどを楽しんだようです。

金さんも宋さんも、佐賀でいろいろな方と交流でき、コミュニケーションできたことが貴重な体験だったと話してくれました。

金さんは、韓国に帰り祖父母の経営を引き継ぎ水稲とハクサイ・馬鈴薯経営に、宋さんは母の肉牛経営をしっかりと引き継ぎ規模拡大したいと将来の夢を力強く語ってくれました。2人の今後の活躍を期待したいと思います。

内海 修一（S49年院修了 農経）

支部だより

佐賀県庁支部

8月31日にグランデはがくれ(佐賀市天神2丁目)において、平成30年度佐賀大学農学部同窓会佐賀県庁支部通常総会を開催しました。今年度は、古賀一生、田中理沙、田村直樹、磯部智樹、草場篤慶、原口俊輔、原本すみれ、河野舞、田中裕太、田中里奈、東島聖【敬称略】の11名が新たに会員になりました。その結果、現在の会員数は249名となりました。

前回から始めた新入会員と女性会員への参加費割



引企画により、例年より多い57名の参加がありました。また 佐賀大学農学部同窓会から小池会長、吉賀副会長（佐賀大学農学部 准教授）のお二人にも駆けつけていただき盛会に開催できました。議事では、滞りなくすべての議案について、承認をいただきました。

新しい支部長以下の役員については、次のとおりに出選されました。支部長：成澤義和（S58）、副支部長：寺崎信行（S61）、石橋泰之（S60）、幹事長：八田 聡（S63）、会計：山口妃鶴（H5）、幹事：

宮原雅明（H14）、山口慎二（H22）、平田真紀子（H28院）、前田貢輝（H25）、熊森 昇（H4）、井上賢二（H3）、監事：口本文孝（S59）、藤 邦広（S61）（文中敬称略、カッコは卒業年）

総会後の懇親会では、毎回恒例の「お楽しみ抽選会」も実施し、時間を忘れるほどに先輩・同輩・後輩と和気あいあいと懇談を楽しむことが出来ました。来年3月に開催される「先輩を送る会」には、多くの会員の皆様に参加していただけるように期待しています。 八田 聡（S63年卒 園・果）

熊本県庁支部

熊本地震から2年が過ぎ、熊本県庁では創造的復興の更なる加速化を図っているところです。そのような中、熊本県庁・佐賀大学農学部同窓会平成30年度通常総会を、9月7日（金）、アークホテルにおいて開催しました。

総会には、同窓会本部から小池会長、吉賀副会長に参加いただき、また農高やJA同窓会等から、さらに2年続けての新規会員の加入もあり、総勢25名の出席となりました。

総会では、金島会長挨拶の後、会計報告、役員改選が行われ、新会長に緒方（S57）、副会長に菊池氏（S57）、監事に三原氏（S58）、事務局に田中氏（H26院）が選出されました。



その後、3月に卒業された4名の先輩方の激励会を兼ねた懇親会に移り、会員相互の親睦を深めると共に、今後も会員同士の結束力を強めていくことや、来年の再会を約束して盛会のうちに閉会となりました。 緒方 久幸（S57年卒 園・蔬）

4年ぶりの「農経会」の開催

丁度4年前に開催された農経会、今回は「3年後にまた会いましょう」から1年超過してしまいましたが、実にタイムリーな開催となりました。つまり、世話人代表の内海先輩が作成し、出席者に配布された資料にも提起されているとおり、平成31年4月に実施される農学部の改組による農業経済分野の「国際・地域マネジメントコース」への再編、今年3月まで農業経済分野を33年間牽引されてこられた白武教授の定年退職等、農経会にとって大きな転換期に当たり、これからの農経会のあり方について、どう方向づけていくか議論しようとのねらいで企画されました。

今回は、10月20日に佐賀市の「グランデはがくれ」において近隣の人を中心に昭和47年から故伊東



勇夫先生が退職された平成3年までの20年間の卒業生有志110名を対象に企画し、丁度3割にあたる33名の会員が東京、福岡・鹿児島・大分・熊本・長崎などからも出席していただきました。同日開催のゴルフコンペには9名が参加、清々しい汗を流し、珍プレーや好プレーが続出し楽しい一日になったようです。当日の出席者も、そのOBやリタイア後の就農者から、現在それぞれの分野のリーダー的役割を担う会員まで、約20歳の年齢差の集まりとなりました。また、急遽出席できなくなった自営農家の角田会員からは、すばらしい丹精込めた深紅のバラの花束を届けていただき、同窓会に彩を添えていただきました。

故伊東勇夫先生は、「農経会」と「農経会報」を研究室と卒業生・社会を結ぶ結節点としての役割を担っていると述べられています（前述資料）。農経会報は途絶えてしまいましたが、農経会は、今後とも定期的な開催を通じて、引き続きその役割を担うとともに、会員の交流と結束を誓い、有田町議長松尾文則氏の万歳三唱で散会しました。

永田 洋一郎（S53年卒 農・経）

会費納入のお願い

日頃より、同窓会活動に多大なご理解を賜りまして、厚くお礼申し上げます。

同窓会会報「ありあけ」の発行、総会・懇親会の開催、大学との意見交換会、支部助成活動、在学生への就職支援など、多岐に亘る活動をおこなっています。これらの事業は同窓会費で賄われており、同窓生の皆様には大変ご協力をいただいておりますが、近年は年会費納入率が極めて低く、同窓会運営にも支障を来しています。

出費多端のところ大変恐縮ではございますが、同窓会の趣旨をご理解の上、納入いただきますようよろしくお願い申し上げます。

なお、既に納入をして頂いている方につきましては誠に申し訳なくご容赦の程お願い申し上げます。

編集後記

●新年あけましておめでとうございます。今年も同窓会会員の皆様にとって素晴らしい年となりますよう心からご祈念申し上げます。平成の締めくくりとなる「ありあけ23号」をお届けいたします。今回も、多くの会員の皆様からご寄稿いただき誠にありがとうございます。

●昨年は西日本豪雨をはじめ多くの自然災害に見舞われ、多くの地域で今なお復旧・復興への取組が続いています。今回の巻頭言では、福岡県朝倉普及指導センター所長・石川博基さん（S58年卒 農・作）に、災害からの復旧・復興へ向けた現場の活動経過の詳細を投稿していただきました。いつでもどこでも起こりうる災害等のリスク管理の大切さを改めて考えさせられ

ました。また、今回は、同窓会と現役在校生との距離感をできるだけ近くするために、卒業後1～2年の若手OB・OGの皆さんに、仕事での戸惑いや突き当たった悩み、課題解決に向けて取り組んでいることや在校生へのメッセージを新たに収録しました。今後も、若手の皆さんの活躍されている様子をお伝えしていきたいと考えています。

●新元号を迎える年に当たり、農学部同窓会としても新たな視点で同窓会報「ありあけ」を充実させていきたいと考えていますので、今後とも会員皆様の多くの投稿をよろしくお願いいたします。

編集担当：内海 修一（S49年院修了 農経）

協賛広告

この度の同窓会報発刊に際しまして、皆様より協賛広告をお寄せいただき誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げますとともに、協賛各社の今後のご発展をお祈り申し上げます。

体をつくる「食」 家族をつなぐ「食」 みんなをつなぐ「食」

JAグループ佐賀は、安全・安心な県産農畜産物の提供を通じてみなさまの豊かな暮らしを支えていきます。

「食」と「農」を基軸とした協同組合として地域に根差した活動に取り組んでまいります。



耕ぞう、大地と地域のmiraい。
JAグループ佐賀



JAグループ 検索



Grain & Pet Care Communication

株式会社 森光商店

〒841-8611 佐賀県鳥栖市藤木町字若桜9-7
PHONE.0942-85-1125(代) FAX.0942-83-8868

ホームページ <http://www.morimitsu.co.jp>